

積雲が浮かぶ穏やかなデルフトの朝。空の明るさが際立っています。(p.16)

1　ヨハネス・フェルメール《デルフト眺望》1660-61年頃　マウリッツハイス美術館



中心部がひときわ明るいのは、斜め上から差し込む太陽光と考えられます。(p.22)

2　レンブラント・ファン・レイン《夜警》1642年、アムステルダム国立美術館



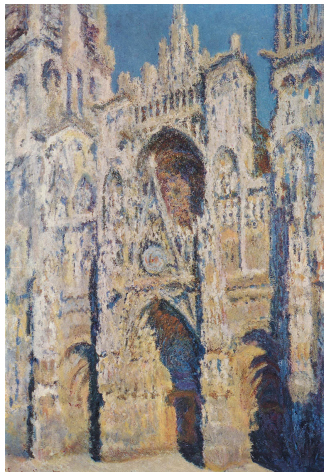
虹は、太陽を背にした時の正面方向で、雨が降っている時に現れます（夏の夕立後などがチャンス）。空の様子も繊細に表現されています。(p.30)

3　ピーテル・パウル・ルーベンス《虹のある風景》1636年、ウォレス・コレクション



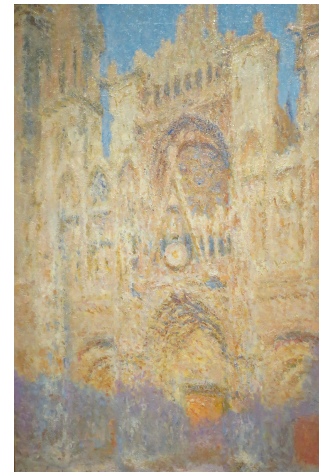
モネの《ルーアン大聖堂》には、時間と天候が異なる33作品があります。こちらは日の出前の「ブルーアワー」の雰囲気を描いているのかもしれません。(p.84)

4　クロード・モネ《ルーアン大聖堂、扉口とアルバーヌ塔、朝の効果》1893年、オルセー美術館



真上から注ぐ太陽光が影を作って、大聖堂のフォルムがくっきりと浮かび上がります。早春の日中に描いたものと思われます。(p.85)

5 《ルーアン大聖堂、扉口とサン＝ロマン塔、陽光》1893年、オルセー美術館



太陽光がややオレンジ色を帯びてきた夕暮れの時間帯で、西日を受けて、大聖堂の正面にある建物の影が下の部分を覆い始めています。(p.85)

6 《ルーアン大聖堂》1892-93年、プーシキン美術館



本来、梅が咲く２月頃は黄やオレンジの夕焼けが見られることが多い。白い梅の花と合わせるためや、春に向かうサインを感じる赤い夕焼けを合わせたのでしょう。(p.119)

7 歌川広重《名所江戸百景 亀戸梅屋舗》1857年



画面を広く占める巻積雲か高積雲。そして本来、雲が少なく日差しが降り注ぐ時に見られる赤富士。季節を象徴する気象条件の異なる要素が巧みに組み合わされています。(p.134、p.161)

8　葛飾北斎《冨嶽三十六景　凱風快晴》1830-34年頃、島根県立美術館(新庄コレクション)



北斎は鮮やかな青「ベロ藍」を使い、空の表現を一気に広げていきました。(p.153)

9　葛飾北斎《冨嶽三十六景　甲州石班沢》1831年頃